

世界遺産アカデミー認定講師 File No.43

このコーナーでは、世界遺産アカデミーの啓発活動にご支援いただいている世界遺産アカデミー認定講師の方に毎回スポットを当てて、お話を伺います。第43回目は、北海道ご出身の高井 理 さんです。高井さんは、観光業界に転職後、添乗員として日本各地をガイドしながら、社内研修の一環として添乗員向けの世界遺産検定対策講座をご担当されています。今回は、高井さんに世界遺産への想いについて、語っていただきました。

——地球上すべてが観光地

2011年にそれまでいた建築業界から観光業界に転職をしたのですが、たまたま出逢い、たまたま転職した先が旅行会社です。それまでは一般の戸建て住宅、とりわけリフォーム部門の営業を担当していた私にとっては、まったく畑違いの職種でしたので、片っ端から観光関係の資格を取得しようと考へて、その中のひとつが世界遺産検定でした。世界遺産を学ぶうちに、自分がかつて訪れていた場所が世界遺産だったのかと知りました。歴史ある場所を訪れると、心が落ち着きますし、神社仏閣に慣れ親しんでいるせいか、文化遺産の方が親しみが持たように思えます。西国三十三観音や坂東三十三箇所などお寺やお城を夫婦で巡っていたのですが、しごく自然なこととして訪れていたのですが、さほど旅行が趣味といったような認識はしていませんでした。余談ですが、私は生まれも育ちも根っからの北海道人ですが、北海道の人たちは、アイヌ文化は別として、歴史に対するコンプレックスがあると思います。昔からの神社仏閣も、奈良や京都と比べると見劣りするようになります。一方で、たまたま「知床」が世界遺産に登録されましたが、北海道自体が広大ですので、まるで自然遺産の中で生活しているような感覚があります。認定講師としては、現在、社内研修として、添乗員を対象とした「世界遺産検定2級対策講座」を行っています。既に2級合格者もいます。そこには野望があります。(微笑)。実は、1級、マイスターの添乗員が増えていって、自分の会社の看板になってもらいたいのです。目指すは、世界遺産検定マイスター30名の会社！「夜景マイスターが案内する室蘭夜景ツアー」のように、「世界遺産検定マイスターが案内する世界遺産ツアー」を添乗業務にプラスしてガイドもできてしまうスタッフ養成が当面の夢です。

添乗員として日本各地を訪れていますと、平泉や日光も好きですが、日本三景や全国各地の小京都、北品川に代表されるように旧宿場町の面影が見て取れるような街並み。世界遺産ではなくとも素晴らしい情景に魅了されます。とりわけ10年前まで住んでいた横浜、そして鎌倉は、当時の思い出も重



武陵源



シルクロード

なって、もう一度訪れたい気持ちに溢れます。17年前までいた会津も、同様です。港町や洋風建築の景色というよりは、自分の思い出がそこに詰まっているから、大切な場所なのです。会津ではこのようなエピソードを覚えています。「会津の三泣き」を覚えておきなさい。よそ者は、最初に疎外感から泣く。会津の人々に受け容れられるようになって、人情で泣く。そして、会津を離れる時、去りがたくて泣く。まさに会津でこのことを私自身、経験しました。それこそ、「会津の父」、「会津の母」という人たちがいます。自分が良いと思った場所、誰かひとりでも良いと思った場所、つまり、地球上すべてが観光地ではないでしょうか。たとえ、そこが実際に足を踏み入れることのできない宇宙、月、未開の地であっても、想像すれば行くことができます。その足で訪れるにしても、妄想で訪れるにしても、心が躍ります。

——「世界遺産」という線引き

とはいえ、世界遺産の中でも特に、3年前に訪れた「武陵源」、シルクロードの「西安」は理屈抜きにシビれました。「武陵源」では、水墨画、山水画で描かれていた光景が広がり、「西安」では、「三国志」の諸葛孔明の没地(五丈原)と言葉を失ったものです。まだ訪れてはませんが、いつか宗教の混在する聖地「エルサレム」にも訪れてみたいです。宗教的にはわりと穏やかな日本で育った私には、こんなに宗教戦争の絶えない、しかもそこが聖地である、というのが信じられません。世界遺産について自分なりの見解があります。「小笠原諸島」の「オガサワラトカゲ」は今でこそ固有種ですが、何万年か前は外来種であったはず。そして現在は「グリーン・アノール」が外来種として駆除対象に、反対に原産地のフロリダ半島では後から持ち込まれた「ブラウン・アノール」によって生存が危ぶまれているそうです。世界遺産条約が、1972年よりも150年早く結ばれていたなら、1889年に竣工した「エッフェル塔」は、『パリのセーヌ河岸』の構成資産としては、ドレスデンの「エルベ渓谷」のように、「それを造るなら抹消する」と言われたでしょう。もし1,300

年前だったなら、「法隆寺」は最新科学技術の結晶、「斑鳩スカイツリー」、もし5,000年前だったなら、「ギザの三大ピラミッド」も単なる現代建築とみなされたことでしょうか。もしくは、人間の寿命が1万年だったとしたら、世界遺産としての稀少価値を見出すことができたでしょうか。

ところで、私の故郷ということもあって、「北海道の石炭産業遺産」や「北海道の開拓遺産」に注目しています。前者は、北海道中部の空知、夕張、室蘭、小樽、三笠などには、日本の近代化を支えた炭鉱遺産として、石炭採掘場や工場、港などがあり、軍艦島とも共通する団地や学校、病院といった、当時の人々の営みが窺える施設も遺されています。今は廃墟となったこの地に、かつては数万人の人々が生活していました。後者は、サッポロビール工場や大通り公園、クラーク博士を代表とするお雇い外国人たち



エルサレム

が住んでいた洋館などで、明治初期・文明開化時代を見せてくれる遺産です。「明治日本の産業革命遺産」の構成資産として、範囲拡大されても良いと思います。つまるところ、人間の諸事情によって、世界遺産になるかならないかが決まります。UNESCOが決めた思想や哲学に基づいて付加価値の付けられた遺産、そして、為政者による後付けの遺産です。歴史的なモニュメントたるものが、その時々人間の都合によって、顕著で普遍的な価値を付け、さらには、負の遺産、産業遺産、文化的景観、近現代建築など新たな価値観も拾い上げます。世界遺産は理屈有りきなのです。世界遺産とは、寿命100年の現代人の我々から見て、「今この瞬間で時を止めてしまおうシステム」なのかもしれません。私にとっては、「それ」が魅力です。特定の人間が取り決めた理屈……と嘆いているわけではなく、そうした「人間の都合」が見え隠れしているところが、世界遺産の楽しさでもあります。と同時に、今ある括りに囚われずに、たとえ自分ひとりだけが認めるものだったとしても、そこに何がしかの想い入れがあるのであれば、世界遺産と同等の価値があるはず。世界にたったひとりの自分、そしてその自分の生まれ育った生家が文化遺産、「自分の死ぬ直前に触れた自然」が自然遺産であっても良いのではないのでしょうか。